博多織プロモーション計画３（４）

ー伝統産業を基礎とした映像コンテンツの構築と社会意識変化の考察ー

Hkata-Ori Promotion Project 3 (4)

-Consideration of the construction of picture contents based on a traditional industry and the change of the social awareness-

星野浩司　井上友子　佐藤佳代　青木幹太　坂本 浩　佐藤 慈　荒巻大樹

Hoshino Koshi　Inoue Tomoko　Sato Kayo　Aoki Kanta　Sakamoto Hiroshi　Sato Shigeru　Aramaki Daiki

九州産業大学 芸術学部

The “Hakata-Ori Promotion Project” since the inception of the program in 2008, has become “Hakata-Ori Promotion Project 3. ”The objective of this year’ s program was a, “Participation in the Society as a whole”. This project was planned to foster the younger generation, whom are interested in the participating in the regional industries through art. They also gained experience in the field through coverage and the Program production in conjunction. This presentation is a review of the students majored in the studies such as; Photography, Imaging Arts. Such experiences were fostered through with the cooperation from the regional industries as well as experiences gained in the field and the other relevant social activities.

Key words: participation, experience, social activities

1. はじめに

近年の景気の後退や社会構造の変化に伴い、国民における職業観の変化は大きく、男女間においても同様である。内閣府が毎年行っている「国民生活に関する世論調査」では、1990 年に入ってから、物の豊かさと心の豊かさのどちらを重視するかについては、「物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をすることに重きをおきたい」とする者の割合が上昇し、約 6 割となっている。さらに、将来に備えるか、毎日の生活を充実させて楽しむかについても 1990 年より「毎日の生活を充実させて楽しむ」とする者の割合が上昇し、6 割近くになっている。また、近年、女性の社会進出が定着し、女性のライフコースに関する考え方が変化していることも、職業観の変化に影響を与えていると考えられる。内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査」によると、女性の就業について「子供ができてもずっと職業を持ち続ける方が良い」と考える者の割合は 1992 年の 23.4%から 2002 年には 37.6%まで上昇し、女性のライフコースにおける職業の持ち方として最も多い考え方となった。さらに、NHK 文化研究所「日本人の意識」調査によると、理想の家庭の在り方として「夫唱婦随」型や「役割分担」型が望ましいとする者が減り、「家庭内協力」型や「夫婦自立」型を理想とする者が増えている。こうした変化は女性だけでなく男性の生活スタイルにも影響を与え、家庭生活と両立可能な仕事へのニーズを高めていると考えられる。本研究は、社会意識の変化について、その具体的な事象をその一端として捉え、それらを詳細に取材・構成し、映像コンテンツとしてより万人が分かり易く再構成することで、現代の日本人の職業観や仕事を通した生きがいを検討し、疲弊する社会経済の新たな改善策の一助を再発見する切掛けになるのではないかと考える。

本研究では、伝統的なものづくり文化を継承する日本で、特に、地域に根ざした伝統産業を新たな視点で捉え、自らの生涯の仕事として継承しようとする人物に注目し、仕事に対する取組みやその人物を取り巻く人々や社会を通して、変わりゆく職業観や社会意識のあり方を考察する。

2. 博多織の振興を目的とした産学連携による実践教育

これまで、九州産業大学では、芸術学部が活動主体となり、NPO 法人博多織デベロップメントカレッジと博多織工業組合協力のもと、博多織の振興を目的とする産学連携活動を 2008 年より３ヵ年に渡り行ってきた。この産学連携活動を「博多織プロモーション計画」と称して、福岡の伝統的な産業である博多織および博多織に関連する地域文化の魅力を大学の視点から捉え、多様な媒体や作品を通して、博多織伝統産業の振興を目的とした情報発信を行っている。この中で、芸術学部の美術学科、デザイン学科、写真映像学科の３学科それぞれの専門性を活かした作品作りを通して、それぞれに所属する学生が主体となって産学が連携する実践教育を目的とした活動を行っている。

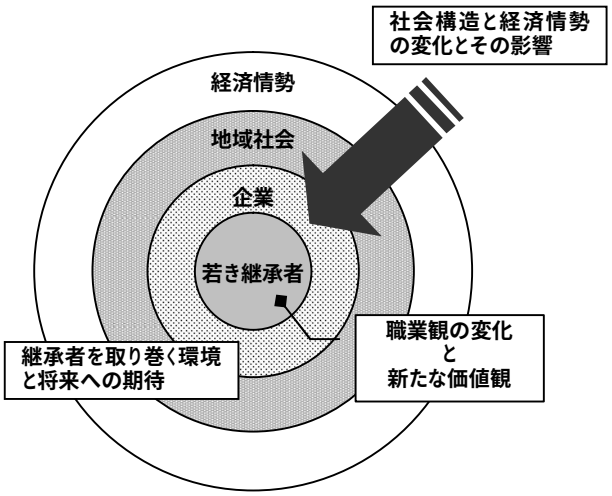

図1　伝統産業における新たな後継者とそれを取り巻く環境

2010 年度に写真映像学科として取り組んだテーマは、近年の社会構造と経済情勢の急激な変化が与える職業観の変化を一人の女性織師を中心に年間を通じて取材し、近年、増えつつある若い女性織師の職業としての伝統産業への関わりと、それを取り巻く地域社会の捉え方を詳細に取材することで、社会意識の変化を考察している（図１）。また、伝統産業の歴史を紐解く映像コンテンツとして、江戸時代におけるファッションとしての帯の変遷を辿る作品や、博多織をモチーフとしたポートレート作品による魅力の再発見としての写真映像作品を制作している。

図2　ポートレート作品による映像制作

図3　バーチャルスタジオを用いた映像制作

3. 研究手法

3. 1　伝統産業の歴史とその魅力を知る映像コンテンツ (図2)

：リアルタイムの映像合成が可能な本学施設のバーチャルスタジオにて、３次元コンピューターグラフィックス映像による江戸の風景を再現し、その中で博多帯の当時の結びで着付けを行い、江戸時代における帯の流行の変遷を紹介している。その他、現在の帯の需要を支える流通事情を取材し、現代の服飾文化に引き継がれる博多織の流行を映像化している。

3. 2　博多織をモチーフとしたポートレート作品 (図3)

：伝統産業としての博多織の魅力を若い世代により分かり易い形で表現するために、博多織をまとった女性をモデルとしたポートレート作品を制作している。特に、今回は季節感を持たせたさまざまなシチュエーションを再現し、モデルとなる女性たちの自然な姿から見える博多織の美しさ、機能性の高さを静止画写真として映像化している。

3. 3　ドキュメンタリー形式の映像作品 (図4)

：これからの博多織を担う若い織師を主人公に、年間を通じて取材し、インタビューなどを含むドキュメンタリー形式の映像作品を制作している。この中では、２０代～３０代の女性を中心に、仕事を辞めてまでも織師を目指す人々が増えているという事実に対し、それらの人々を惹き付ける博多織の魅力とは何なのか、また、それら若き継承者はこれからどのような人材となっていくのか？それらについて詳細な取材に基づき映像化している。

3. 4　映像コンテンツを基礎とした社会意識変化の考察 (図5)

：複数の映像コンテンツを基礎に、博多織をモチーフとした江戸時代から現在までにおける流行の変遷とそれらを支える継承者の動向を詳細な取材と映像という説得力あるコンテンツを用いて総合的な考察を行う。

図4　ドキュメンタリー形式の映像制作

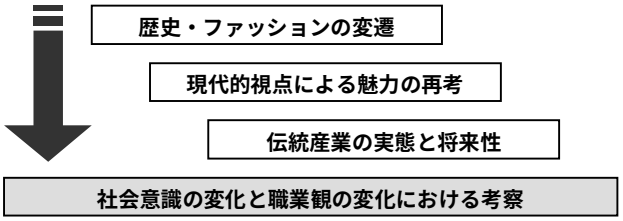

図5　各映像コンテンツを総合した社会意識変化の考察

4. 近年の職業観の変化を考察する

本研究では福岡の伝統的な産業である博多織をモチーフとして、その歴史の変遷を辿る目的で当時の町並みをバーチャルスタジオ内で再現し、ファションとしての博多織の粋の世界を取材している。さらに、博多織の着物や帯を纏ったモデルをポートレート形式で写真撮影することで、着物をあまり着なくなった若い世代への博多織の魅力を紹介している。また、博多織の手織りを自らの生涯の仕事として選んだ福岡市内の企業に勤める３０代の女性について１年間取材し、その女性の職業観や博多織への思いや女性を取り巻く周囲の人々のインタビューを収録し、ドキュメンタリー形式の作品にまとめている。この作品は、３０代にして既に勤務していた企業を辞め、新たに博多織の世界に飛び込む女性が増えているという現状に触れたことが取材の切っ掛けであり、変わり行く職業観が顕著に現れた事例として考察の対象としている。作品内では、取材対象の女性織師の転職理由が、「日本古来の文化をより深く理解したい」という重いが契機となり、『生涯を通じて「生きがい」の感じられる職業とは何か？』ということを求めたことが切っ掛けになったことが取材の中で明確になった。また、女性を温かく見守る周囲の博多織関係者の将来を見据えた伝統産業の継承が支えとなり、女性がより生き生きと働ける環境作りが進められたことも重要な点であると考えられる。取材した企業の責任者は「従来の職業観は変化し、職人としてのこれまでの厳しい捉え方ではなく、趣味の延長として好きだからその仕事を選ぶというかつて無い尺度をもった若い世代が増えている」という近年の職業観の変化を肌で感じている意見も述べている。これらの点から、伝統産業やものづくり文化を将来に渡って継承する新たな人材の育成においては、変化する職業観のあり方そのものを受け入れ、職業としてのものづくりの厳しさも踏まえた上で、これまでとは異なる価値観の世代における「生きがい」を持てる職場作り、環境作りが必要であると考える。